

男らしさという鎧—シングルペアレント向けシェアハウスの事例から見る

シングル・ファザーを取り巻く問題—

1355147 大橋黎菜

指導教員 藤掛洋子

【背景と目的】

家庭への支援施策は近代になり多様化し、行政においてもひとり親支援の重要性が高まり始めている。しかし、実際にはそういった支援は父子家庭には届いておらず、あまり効果があるとは言えない。十分な支援がないまま、シングル・ファザーたちは仕事と子育ての両立に苦しんでいる。そこで、私はシングルペアレント向けシェアハウスによりシングル・ファザーのワークライフバランスを実現することが可能なのではないかという仮説のもと、調査を行った。

【方法】

調査手法は文献調査とインタビュー調査である。文献調査では、研究者により明らかになったシングルペアレント向けシェアハウスの実態を比較、考察していく。インタビュー調査では、シングルペアレント向けシェアハウス事業に携わる方にお話を伺い、シングル・ファザー向けシェアハウスの可能性について調査した。

【結果及び考察】

調査の結果、シングルペアレント向けシェアハウスの特徴はシングル・ファザーのワークライフバランスを実現するためには有効であるということが分かった。しかし、同時にシェアハウスという生活形態とシングル・ファザーの親和性が極めて低いという課題も明らかになった。私は、この課題の背景には、シングル・ファザーが抱える男性特有の問題があると考えた。それは、社会が作り出す男性性というジェンダーバイアスである。社会はシングル・ファザーに「男」としての男性性、そして「父」としての男性性を求めている。シングル・ファザーたちはこの2つの男らしさに支配され、様々な面において制限されていると考えられる。この心理的な支配により、シングル・ファザーは支援から遠ざかり、助けを求めることをためらって

しまうのだ。

【結論】

シングル・ファザーが抱えている問題を解決するには、「男」としての男性性と「父」としての男性性という2つの男らしさという縛りから彼らが解放される必要がある。では、シングル・ファザーをこうした二重の男らしさから解放するために必要なものとはいったい何なのか。それは、「自分らしさ」という軸のもと己のアイデンティティを再構築するとともに、父親スタイルを見出すことが必要だと考える。ここで重要なのは、シングル・ファザーひとりが抱え込むのではなく、行政が彼らに手厚いケアを行いながら、一緒に追求していくということである。社会に深く根付くジェンダーバイアスを根本的に改革するには長い時間がかかり、いまだ強い性差別や家族主義が残る。だからこそ、行政が当人たちと一緒に働きかけることで、社会全体へと意識改革を促していくのである。